2023
02
FREE

南阿蘇村 地域おこし協力隊

ヒトコト録

プロジェクト、自分ごと、暮らしごと。

自分が自分でいられること。
知らなかったことを知ること。
地域と向き合うこと。
誰かを笑顔にすること。
自分のことも、暮らしも
仕事もたいせつに
地域おこし協力隊として
この村と歩いていく。
もしかするとそれは
とてもわがままなことかも
しれないけれど
覚悟と遊び心を持って
手を伸ばしたい。

藤岡 政人
大内 佑介
田内 秀樹
桑原 健一
野津 周平
市村 孝広
槌田 晴菜
田上 由菜
小屋迫 瑛
長澤 静香
鈴嶋 千芳子
吉田 洋樹
宮脇 悠
赤星 静香
家入 明日美

南阿蘇村
地域おこし協力たい

【目次とプロジェクト概要】

P.04 **南阿蘇鉄道復興支援プロジェクト**
熊本地震の被害を受けた南阿蘇鉄道の全線復旧に向けた業務。

P.05 **地域経営組織推進プロジェクト**
観光情報発信、イベント企画運営等を通じて、村内事業者の活性化に寄与する。

P.08 **スマートヴィレッジ推進プロジェクト**
村のスマートヴィレッジ構想に基づき、IT企業と村の橋渡し役を果たす。

P.09 **黒川区創造的復興プロジェクト**
黒川地区を拠点に、震災遺構ガイド等を通じて復興を支援する。

P.10 **有機農業推進プロジェクト**
「風景を守るごはん」をテーマに、有機農業について学び推進する。

P.12 **新規就農プロジェクト**
農業の現場を学びながら、任期後の新規就農を目指す。任期は2年。

P.17 **シルバー人材開拓プロジェクト**
シルバー人材センターの事務を中心に、高齢者がいきいきと活躍できる場づくりを行う。

P.18 **移住・定住促進プロジェクト**
村の暮らしを体感してもらう交流会の企画、空き家・空き地活用の啓発等に取り組む。

【はじめに】

こんにちは。南阿蘇村地域おこし協力隊です。

わたしたちは、それぞれの思いを携えて、この村にやってきました。
総務省が掲げる地域おこし協力隊の目的は「地方創生」や「地域活性化」。
けれど、わたしたちは明確な「答え」を持っているわけではありません。
皆さんという地域の〝主役〟を支え、一緒に考えながら歩いていきたい。
地域のことを勉強したいし、いろいろな人と話したい。
ぐるぐる、ぐるぐる。模索する毎日。
火山のように爆発的なエネルギーではないかもしれないけれど、
静かにこんこんと湧き出でる水のように、
地域を育む力になりたいと思います。

2022年12月現在、
南阿蘇村では、8プロジェクト15名の地域おこし協力隊が活動しています。
今回タブロイドを発行したのは、
わたしたちを支えてくださっている地域の皆さんに、
心からの感謝をお伝えしたかったから。
あわせて、わたしたちのことを知っていただくきっかけになれば、
とてもうれしいです。

2023年2月　南阿蘇村地域おこし協力隊一同

移住・転職で手にした、宝物のような時

File.01

産業観光課

藤岡 政人さん

【南阿蘇鉄道復興支援プロジェクト】

大阪府東大阪市出身。家具職人として10年、鉄道製造の職人として10年を過ごした後、南阿蘇村へ。2019年11月着任。3年の任期を終え、2022年11月から延長期間に入った。妻のおすすめスポットは、杖立温泉（小国町）。

電車をつくってよ！

藤岡政人さんの転機は、鉄道好きの甥の他愛ないひと言によってもたらされた。注文家具の職人だったという藤岡さんは、甥にとって「なんでもつくれる人」だったようだ。無邪気な言葉に真剣に応えて、藤岡さんは列車を製造する職人になる。木から鉄。ものづくりという意味では共通する部分もあるものの、扱う素材の性質からしてまったく異なる分野への挑戦。けれど藤岡さんは、「自分には鉄が合っていたみたい」と話す。

すべての工程に人の手が介在すること。妥協を許さないミリ単位の正確性が求められること。ひとつの目標に向かって、チームで力を合わせること。それらに藤岡さんなりの「正直さ」を見出し、楽しさと大きなやりがいを感じていたという。

家族の光が、一番大切

充実した仕事を手にした藤岡さん。一方で、家族や暮らしに焦点を当ててこなかったことに気づき始める。子どもが生まれる頃に生活を見直し、大阪府を離れて妻の地元である熊本県へ移住することを考えるようになった。

可愛い2人の子ども

移住先候補に挙がったのが、観光でよく訪れていた阿蘇地域。水の良さに感動したこと、妻が温泉好きだったことが気持ちを後押しした。阿蘇周辺で鉄道関係の仕事を探したところ、村の地域おこし協力隊の募集を発見し、応募。南阿蘇村へ移住する。

それから丸3年。日に焼けた顔をくしゃくしゃにして、「家族の光が一番大事」と話す、藤岡さんがいる。あまりにもまっすぐな言葉が懐に飛び込んできて、腹の底にしっかり落ち着くような感覚がした。

家族と共にいる時間を大切にしたい。そのために、生活の場や仕事を変化させてきた藤岡さん。だから、仕事を離れれば、完全オフモードが鉄則だ。

正直に向き合うこと

軸を置くのは家族。だからと言って、仕事を疎かにするような藤岡さんではない。主な業務である点検作業では、一歩ずつ歩きながら専用の器具で線路を叩き、状態を確かめる。こうして、枕木のズレがないかなどを調べているのだという。「地域の方のご協力あっての仕事だから、コミュニケーションを取っていきたい」と、通りかかる住人への挨拶も欠かさない。「地味な仕事でしょう（笑）。でも、線路脇で作業しているときにトロッコ列車が通ると、乗っている子どもたちが手を振ってくれる。それがとてもうれしい」。

家族と仕事。正直に向き合うことで得られた今が、藤岡さんの宝物だ。

家族4人、笑顔で♪

1. どこまでも続くかに思える線路を、丁寧に点検。災害で線路に影響があったときも、いち早く現場に駆けつけて対処する。
2. 南阿蘇鉄道は、住人の生活に密着した交通手段。2023年の全線開通に向け、「もっときれいに整備したいですね」と藤岡さん。
3. 使い込まれた道具たちが、誠実な仕事ぶりを証明してくれる。

File.02

産業観光課

大内 佑介さん

【地域経営組織推進プロジェクト】

福島県二本松市出身。2019年12月着任、延長1年目。阿蘇市出身の妻と共に移住。そもそも、九州に来たことがほとんどなかったそうだが、休日は妻と熊本県内をドライブするのが楽しみに。天草の海は特に印象深いと話す。

自分がおかしくなっていく

自分が自分でなくなっていく感覚というのは、苦しいものだ。望んで就いた仕事のはずなのに、やりがいを感じているはずなのに、なにかが歪んでいくような。地域おこし協力隊員の中にはそんな感覚に悩み、転職と移住を選んだ人がいる。大内佑介さんもそのひとり。「東京が合わなかったんだと思います。地元は、自然が豊かなところだったから」。テレビ制作業界の仕事は、華やかな一方、激務。気持ちがどんどんやさぐれていくことにも気づいていたと、振り返る。とうとう人と接することが苦痛になり、妻(当時は婚約者)の地元の近くである南阿蘇村へ移ることにした。

「南阿蘇に来て、ちょうどいい距離感で人と接することができる。優しくて、温かい。最初はもっと田舎をイメージしていましたが、観光地として人がよく訪れる場所だし、思っていたよりずっと住みやすかった」。そう話してくれた大内さん。穏やかな表情を見れば、充実した暮らしの様子が伝わってくる。

伝えることの喜び

地域おこし協力隊として携わる観光の仕事は、すべてが初めてのこと。けれど3年続けてみて、「自分には合っているのかも。任期後も、観光関係の仕事ができたらいいなと思うようになりました」と、手応えを感じている。「観光に訪れた人たちを、どんなふうにおもてなしできるかなって考えるのが楽しい。『阿蘇っていいね』と言ってもらえたときは、うれしいです。気持ちが伝わった！って」。

着任当初は特に、コロナの影響を強く受けていた時期。困っている事業者の力になれないものかと始めたのが、ショップカードづくりだった。1店舗につき1枚作成して観光案内所に設置したところ、大好評。全種類持ち帰る人も多いそうだ。

観光局主催のイベントでは、MC役をこなすことも。昨年11月に行われたモルック(ボウリングに似たゲーム)のイベント会場には、参加者と一緒に一喜一憂しながらイベントを盛り上げる大内さんの姿があった。

「これから何をするにしても、家族や自分という基盤を大切にしたい。そのために選んだ、熊本での暮らしでもあるから」。そう話してくれた大内さん。そこに、やさぐれた陰はなかった。

個人的ベストショット!
鮎返りの滝

基盤は、家族と自分。
そこに立ち返って見えたこと

熊本で結婚式♪

1. 道の駅あそ望の郷にある観光案内所には、大内さんが手がけたショップカードがずらりと並ぶ。カードを全部集めて、店を訪れる度にチェックする楽しみも。

2・3. イベントMC中の大内さん。親しみやすいアナウンスで会場を盛り上げていた。

人生テーマは、あくなき挑戦

やったことないけど、やっちゃえ！

File.03
産業観光課
田内 秀樹さん
【地域経営組織推進プロジェクト】

熊本県熊本市出身。阿蘇への移住を考えていた頃、当時現役の隊員に誘われる形で2020年2月着任。2023年1月末退任。「協力隊をしながら生業を作るのはかなり大変ですが、やってよかった。地域の人とつながれるのが一番うれしい」。

トライ&エラーで前に進む

目標を立て、必要なことを学び、スケジュールを切る。行動しては軌道修正し、ときには別の道を模索する。そうして一歩ずつ着実に、目指す方向へ。

必要なこととわかっていても、実践は容易（たやす）いことではない。でも、田内秀樹さんはそれをやってしまう。「いや～大変」なんて頭をかきながら、地域おこし協力隊として観光局の仕事を回し、妻と共にタイ料理店を切り盛りしてきた。そしていまは退任を見据え、ゲストハウスのオープンに向けた動きが本格化しているところ。

いつ会っても、「いまはこんなことをやっている」と、新しいステップについて話してくれる田内さん。想像するよりずっと大変なのだろうけれど、いつもニコニコして「これから」を語る姿に、なんだか勇気をもらえる。

その挑戦魂は、前職での経験によって培われてきたもののようだ。「もともとは技術屋さんなんです」。設備開発・機械設計のエンジニア歴は、かれこれ25年。「考え方次第でいろいろな工夫ができる。挑戦して、失敗して、調整して、また挑戦。それが楽しかった。分野は違うけど、いまやっていることにも通ずるものがあります」。

タイのチキンカレー『ゲーンクワガイ』

人と人がふれあえる場を

あたりまえに眺めていたふるさと熊本県の景色に違う印象を抱くようになったのは、仕事の都合でタイと熊本を行き来するようになってから。一時帰国の度、飛行機から阿蘇の山並みを見渡して、そのダイナミックさに心を揺さぶられた。「阿蘇には世界に通用するポテンシャルがある！」長年のエンジニア生活を経て、「現場で人と接することが好き。いままでは計算がメインだったけれど、芸術的で感情的なことにより心が惹かれる」ことにも気づいていた田内さん。人とふれあえる場、楽しいアイデアが生まれる場を自らの手でつくろうと決め、妻を伴って帰国した。その表現の場が、地域の人に向けてタイの魅力を発信する飲食店であり、海外に向けて阿蘇の魅力を発信する宿というわけ。

「もちろん、やったことはありませんよ。ないならつくってしまおう、できるだけ自分でやってしまおうという感覚は、やっぱり技術屋的思考かな」。DIYにも初挑戦し、必要だからと電気工事士の資格まで取得してしまうのだから、驚かされる。開店1年を迎えたタイ料理の店は「本格的な味を楽しめる」と、地元民にも旅行客にも評判だ。

協力隊の任期を終え、いよいよここからが本番。南阿蘇で積み重ねた時間を携えて、新たなステージへ踏み出す田内さんがいる。

ガパオライスに使うホーリーバジル

1. 協力隊として企画した、やまめのつかみ取りイベント。
2・3. タイ料理の店、アロイジャン。壁紙はタイから取り寄せるなどし、異国情緒が漂う。店舗隣の古民家を改装してゲストハウスにする予定だ。
4. 店で使う香辛料の一部は家庭菜園でまかなう。菜園の手入れと料理の監修は、妻のソプラコン＝ジャンティパさんが担当。写真はパパイヤの木。

File.04

産業観光課

桑原 健一さん

【地域経営組織推進プロジェクト】

東京都板橋区出身。2019年12月着任、延長1年目。料理の専門学校で学んだ後、イタリアンの飲食店で修業に励んだ。観光の仕事を通じて飲食店事業者とつながれることも、身になっているという。デザート作りもお手の物。

きっかけは震災ボランティア

料理人を目指して東京の飲食店で働いていた桑原健一さんは、あるニュースにふと目を留めた。熊本地震のボランティアに関する内容で、「ちょうど長期休暇が取れたことだし、家でゴロゴロしているくらいなら」と、一路熊本県へ。阿蘇市に入ってボランティアに携わるなかで、同じく県外から来ていた同年代の仲間と意気投合。ボランティア期間が終わってからも、熊本でよく会うようになった。

そんな交流が2年ほど続いた頃、仲間のひとりが南阿蘇村に移住したというではないか。「遊びに来てみてびっくり。自然が多くて、より近いところにあるように感じられました」。まさか自分が移住するなどとは考えてもみなかった。だが、折に触れ阿蘇の魅力を耳にするうち、次第に心が動かされていく。「友人が阿蘇で会社を立ち上げたりしているのを見て、自分もなにかやってみたいと思ったのが大きいです。面白そうかもって」。地域おこし協力隊の情報を知り、気持ちが固まった。

人も自然も、大好き

「村の人、みんな温かい」。そう言ってくしゃっと笑う桑原さん。近所から分けてもらった野菜の新鮮さにもいたく感動したと話す。「この人が育てた野菜を、どうやっておいしく食べようかって考えるのも楽しい。あたりまえに野菜を買っていた頃より、ありがたいなって実感することが、増えた気がします」と、さすが料理人らしいコメント。そして、おすそ分けをいただけるような思いやりに満ちた関係を築いてきたことがうかがえて、感慨深い。

景色なら、北から望む南外輪山の姿が一番好き。「久木野からの五岳の眺めが定番ですけど、ぼくは南外輪山の優しい雰囲気がいいなって。住んでいるアパートの窓から見えるんですよ。地元の方は見慣れているんでしょうけど、ぼくにとっては毎日新鮮な感動があります」。

任期後の目標は、ローマピッツァの店を開くこと。「日本ではまだ馴染みが薄いんですが、すごくおいしいんです。地元の人に気軽に訪ねてもらえる店にしたいと思っています。みんなから『待ってるぞ』って言われるのがありがたい」。業務時間外では飲食店のアルバイト等をしながら、構想を膨らませている。

大好きな場所で、大好きな人たちのために
腕をふるう日を夢見て

1・2. 観光局では、レンタサイクルやガイド受付業務に携わる。
3. ある日の昼食時。普段の食事はもちろん、ほぼ自炊だ。「たとえばもも肉1枚が、調理次第でいろいろな味わいに変わるのが面白い！ 目分量で味付けすることが多いんですが、思いがけない仕上がりになったりもして、わくわくします」。主催イベントで料理を提供することもあるそう。

File.05

政策企画課

野津 周平さん

【スマートヴィレッジ推進プロジェクト】

島根県出雲市出身。熊本県内で転職・移住先を探していた際、地域おこし協力隊の制度を知る。「大好きな熊本で働きながら、次のステップを考えられる」点に魅力を感じ、2021年4月着任、2023年3月退任予定。

人生を、楽しくする。
必要なのは、ほんの少しの行動

新しい知識をゼロから学ぶ

小学校の教室から、子どもたちのはしゃぎ声が聞こえてくる。「先生、これどうやるの？」「音をつけてみたよ」。先生と呼ばれているのは、野津周平さん。「こうしてみたらどう？」「おっ、すごいじゃん！」と、パソコンを覗き込み、笑い合う。野津さんは、地域おこし協力隊として小学校のクラブ活動の講師を引き受けているのだ。

着任時のIT知識はほぼゼロ。それでも挑戦できるところが、協力隊制度の特徴のひとつ。野津さんは着任後からオンラインでプログラミング専門講座を受講。今後は、プログラミング講師としての仕事も請け負う予定だ。

熊本へ"帰る"

大学時代を熊本県で過ごした野津さん。バイクにはまり、仲間とツーリングに出かけたり、沖縄を除く46都道府県を旅したり。「大学生って、一番感受性が豊かな時期。その時期に自我をもって自分の時間を過ごしたのが、熊本なんです」。なにかに付属するものではなく、自分というひとりの人間を意識した。そのとき野津さんは、生まれ直したとも言えるだろう。

就職を機にいったんは地元へ戻るも、「いつかは熊本へ」という気持ちはずっと燻っていた。コロナ禍を受け、これが潮時と退職と移住を決意。決して前向きな気持ちだけでの決断ではなかったが、職場の上司や妻、熊本のバイク仲間たちが背中を押してくれたと話す。

考えすぎないこと

野津さんが密かに大事にしていることがある。「なにかを選ぶときは、保守的じゃないほう」。それを意識づけてくれたのは前職場の上司。「保守的な会社に、斬新なアイデアをぶつけていく人でした。自分の人生、思いっきり楽しく生きようよって教えてくれたんです」。

人生を楽しく。そのために、「まずやってみる。やめてみるでもいい。あんまり難しく考えすぎないことも大切かも」。執着やこだわり、こうあるべきという固定概念。それらから、少しでも距離を置くと決めた野津さんがいる。行動の先が、いまより少しだけ生きやすい世界へつながっていると信じて。

学生時代にバイクにはまる

いまはそっぱら車で

1・2. 協力隊業務の一環で、久木野小学校のクラブ活動「パソコンクラブ」の講師を務める野津さん。この日はプログラミングでゲームを作る日。ためらいなくパソコンを操作する子どもたちに、「自分のほうが教えてもらうことも多いんですよ」と笑う。

3. 2022年6月、天草トライアスロンに挑戦。リレーの部で総合3位に！

これが、自分の人生だ。そう胸を張れる自分でいたい

File.06

政策企画課

市村 孝広さん

【黒川区創造的復興プロジェクト】

大阪府東大阪市出身。東海大学阿蘇キャンパスで畜産について学び、大手食品加工メーカーに就職。「30歳になったら立ち止まろう」と決めていたとのことで、熊本に帰る道を選んだ。2021年2月着任。

初めて手にした居場所

「ここは、たくさんの”初めて“をくれた場所」だと、市村孝広さんは言う。カブトムシを採ったり、人の優しさを身近に感じたり、ボランティア活動で幼稚園の子どもたちと接したり。「田舎を感じた」のも初めてのこと。自分が自分でいられる居場所を手にした、東海大学阿蘇キャンパスでの4年間。

あの熊本地震のとき、市村さんは秋田県で社会人3年目を迎えていた。「大切な場所が大変なことに…」。その衝撃は、市村さんを容赦なく傷つけた。「そのときから、人生が音を立てて変わっていったように思います。それはほんの少しの変化だったかもしれないけれど」。

ただ、市村さんはそのとき「動けなかった」。そうしていつしか、「忘れてしまっていたのだと思う」。聞けば、心の傷を埋めるように、がむしゃらに仕事に打ち込んでいたことが窺える。社会人としても大切な時期であったことは間違いないのだけれど、市村さんの中に、その選択は「後悔」として残り続けているようだ。見ないふりをしていた心の瘡蓋（かさぶた）が傷も生々しいままに剥がれ落ちたのは、5年後のことだった。

自分らしくいられる選択

30歳を迎えた市村さんは、5年分の後悔を取り戻すように動き出す。「正直、仕事から逃げたかったのもある。ぎゅっとまとまっていたはずの心の箍（たが）が緩んで、バラバラになりそうな感覚」。市村さんを市村さんたらしめていた「箍」。それはきっと、南阿蘇村で過ごした時間だったのだ。

地域おこし協力隊としての主な活動場所は、震災伝承館轍（わだち）。旧長陽西部小学校の一部を震災の記憶を伝える場所として整備し、村の施設として土曜日のみ開館している。来場者へのガイドも、市村さんの仕事のひとつ。その熱い内容に、涙をこぼす人も。苦しさの先に、希望の光を掴めるような気持ちにしてくれる。まさに、市村さんにしかできないガイドだ。

市村さんは住民から震災の体験談を聞き取り、東海大学生グループと交流するなどして、熊本を離れていた時間を埋めてきた。そして学生時代を過ごした黒川区で生活し、区役にも参加しながら、地域の人たちと親しく言葉を交わす。

「自分はビビりだけど、本当は大声で言いたい。これが、おれの人生だ！ って。それを体現できる自分でいたい」。安定した仕事を手放し、生活そのものをガラリと変えた。学生時代と違い、生活面でのプレッシャーもある。不安がないわけはないだろう。それでも思うのだ。市村さんのこの笑顔が、すべての答えなのだろうと。

1. 轍にて。この1年で、すっかりガイド姿が板についてきた市村さん。真剣な話の中に、ホッと場が和むトークを挟んで、ともすれば沈みがちな空気を明るくする。
2. 国道57号線沿いの数鹿流崩之碑（すがるくずれのひ）展望所から、崩落した旧阿蘇大橋の様子を見学。
3. 耕作放棄地の活用を模索して、有志で「めぇめぇの会」を立ち上げた。東海大学でかつてお世話になった先生にアドバイスをもらいながら、羊の飼育を開始。退任後の多業のひとつに考えているそう。

File.07

農政課

槌田 晴菜さん

【有機農業推進プロジェクト】

大阪府堺市出身。尊敬する職場の先輩の知人が南阿蘇村にいたことで縁がつながり、2021年11月着任。「農家にならなくても、農業を学んだり家庭菜園に挑戦したり、『できるかもしれない』を増やしていけたらいいなと思います」。

自然を身近に感じていたい

実家と職場を往復し、動物看護師として働いて、いただいた給料をキャンプや旅行の費用に充てる。仕事にはやりがいがあったし、暮らしに大きな不満があったわけでもないのだけれど、強いて言えば「田舎で暮らしたい」という漠然とした憧れがあったと、槌田晴菜さんは話す。「自然が好きなので、休みの度に遠出していました。そのために1ヵ月働く、みたいな。とにかく大阪を離れたい気持ちがあったのかも」。

そんな折、熊本県は南阿蘇村の地域おこし協力隊募集の話を耳にする。これをチャンスと、なんと、一度も現地を訪れないまま移住を果たす。「自然豊かなこの景色を眺めるのが好き。最近気づいたんですが、移住してからはあんまり遠出しなくなった。ここにいるだけで楽しいからなのかな」。傍(はた)から見れば思いきりのよすぎる選択だったかもしれないけれど、こうして語る槌田さんを前にすれば、それは必然だったのではないかとも思えてくる。

学びと小さな変化

協力隊業務は事務からイベント運営まで多岐にわたり、役場で、農業公社で、畑で、イベント会場で…とてんてこ舞い。はじめのうちは戸惑うことも多かったそうだが、「少しずつ方向性が見えてきた。やることはいっぱいですが、それが楽しい」と、充実感を得ている。「有機とかそうでないとかは抜きにして、自分が農業の面白さに触れさせてもらったように、いろいろな人にまずは『知って』もらいたい」というのが、協力隊として約1年活動してきた槌田さんが抱く思いだ。

移住を経て普段の生活にもちょっとした変化が現れた。「食に対する考え方が変わりました。できるだけ村内や県内の野菜を買うとか。それが、地域の農業を支えることにつながるんだって知ったから」。大好きになった村の景観を共に守る一員として、自分にもできることがあるかもしれない。そんなふうに思えるようになったという。

環境の変化は、人間として成長するきっかけをくれる。新しい景色、知らなかった知識、異なる人間関係。それらを得てどうありたいと望むのか。「いまが一番幸せ」。そう胸を張れるかは、自分次第だ。

自分にもできることがある。
いまが人生で一番幸せ！

茅メリリ体験

くまモン大好き!

1. 新規就農プロジェクトメンバーと一緒に、ブドウ狩りの現場へ。農作業に触れる機会も多い。
2. 農業公社の清掃作業も仕事のひとつ。
3. 趣味はバイク。大阪にいた頃と比べて、遠くへ行きたい欲求は落ち着いたものの、「ツーリングに行ったり、しまい込んだままのキャンプ道具も、そろそろ使いたいな」。

毎日とっても忙しくて、毎日すっごく楽しい！

File.08

農政課

田上 由菜さん

【有機農業推進プロジェクト】

東京都練馬区出身。2021年9月着任。南阿蘇村で泥だらけになって遊んだ幼い頃の思い出が、移住を後押ししたという。退任後に向けては、半農半Xを模索中。2022年春には両親も移住し、家族で村の暮らしを満喫しているところ。

南阿蘇村は心のふるさと

「空気がよくて、水がきれいで、人が優しくて、天国みたい」。田上由菜さんの南阿蘇村のイメージは、小さい頃から変わっていない。祖父母が南阿蘇出身のため、学校の長期休暇を利用して村内の親戚の元へ度々「里帰り」していたと話す。「南阿蘇で暮らしたい」。そう、ずっと願ってきた。

その手段のひとつとして、高校生のときから地域おこし協力隊という全国の制度があることも調べていたという。大学を卒業した年に募集が出て、そのまま着任の流れに。

仕事と自分事

協力隊として従事するのは、有機農業推進プロジェクト。とはいえ、農業についてはずぶの素人だ。本を読んだり、協力隊として活動したりするなかで、田上さんなりに向き合っている段階にある。

「この風景を、10年、20年先まで残していくために、自分に何ができるのか模索中です」。農業への関わり方は人それぞれで、いいとか、ダメとかではない。それが、いまの落としどころ。正直なところ、その間に横たわる溝の思いがけない深さに悩むこともある。でも、「ふと見上げたところに阿蘇山があると、悩みも吹き飛んじゃいます」。

やっぱり、くまモン大好き!

村で暮らしてみて気づいたのは、「意外と忙しいぞ」ということだ。協力隊の仕事は一応休みなのだけれど、農家の手伝いに呼ばれたり、個人的に興味のあることに手を出したり。仕事と自分事の境界はあいまいで、「でもそれが、嫌な忙しさじゃない。むしろすっごく楽しいんです」と、田上さん。弾むような口ぶりで話してくれたことのなかで特に印象深いのは、小麦づくりのことだ。

パンが好き、という理由で「自分で小麦を育ててみよう」と思い立ち、親戚の手を借りて業務外で実践。麦踏み（30センチくらいに育った麦を踏み倒す作業）では、「小麦が死んでしまうのではないかと不安になった」が、しばらくすると「グワッと起き上がってきて、生きてるんだなって感動！」。

結果的に70キロを収穫したが、大変だったのはむしろその後のほうだ。「製粉の工程を考えていなくて…」。結局、小型製粉機を借りて製粉作業に明け暮れることに。小麦を育ててパンを作る。その間を考えることの重要性と農家の苦労の一端を、身をもって学んだ田上さん。その経験はきっと、何ものにも代えがたいものになったことだろう。

興味を持ったなら恐れず挑戦し、吸収して、自らの糧にする。そんな田上さんの体当たりな姿勢に、ハッとさせられた。

育てた小麦でパンづくりに挑戦

1

3

2

4

1. 電話対応では、早口の熊本弁のやりとりに四苦八苦することも。

2・3. 村の空き家バンクで購入した家で、家族と暮らしている。愛猫キャスのことは、「世界で一番愛しています」。

4. イギリス、アイルランド留学の経験あり。久しく英語を話していなかったので、「感覚を取り戻したい」とのこと。

File.09

農政課

小屋迫（こやさこ） 瑛（あきら）さん

【新規就農プロジェクト】

熊本県甲佐町出身。2022年3月着任。「おいしいって言ってもらえる農家になりたい」。就農の際は、南阿蘇村にある、亡くなった祖父の農地を引き継ぐ予定。現在は祖母と2人暮らし。「祖母が元気になったようだ」とは、母の談。

信頼関係やつながりを鍵に、この場所で農家として生きる

農業って、いいなぁ

「都会より田舎のほうが好き。身体を動かすのも好き。農業、いいなって思って」。小屋迫瑛さんはいつも、シンプルに自分の気持ちを表現する人だ。そして、どちらかと言えば実践派。「独立して自分でやってみたら、どんなふうにできるだろう？」と、着任1年目ながら、気持ちはいつも未来に向かっている。

地元にいた頃、両親の友人の農家の手伝いを通して農業に興味を抱き、独学で知識を身につけた小屋迫さん。さらに専門的な学びを求めて、県立農業大学校に約1年通った。「独学でやって、わかったこともそうでないこともあった。農大で勉強したことで、点と点が線になった気がします」。そのときにお世話になった講師が、村の地域おこし協力隊への応募をすすめてくれたという。

信頼関係を大切に

小屋迫さんは、独立後の主要栽培品目に、アスパラを考えている。地域おこし協力隊の業務をこなしながら、村内の農家で研修する日々。一番好きな作業は、やはり収穫。これから出荷されるのかと思えば、感慨もひとしおだ。

アスパラは収穫後にそのまま生長させて葉を茂らせ、光合成を促し栄養を根に蓄えさせるのだが、ここで小屋迫さんは農家の職人技に舌を巻いたと話す。「どの塩梅で茂らせるのか、逆に剪定するのか、自分には全然わからない。これを習得するには、すごく時間がかかりそう」。いまは少しずつ学びながら、自分の中に落とし込むことの繰り返しだ。年に一度の作業も多いからなおのこと、目で見て、身体と頭をフルに動かす。毎日、膨大な情報が頭の中を駆け巡っていることだろう。

独立すれば、ひとりで責任を持って農業と向き合うことになる。けれどそれは、決して「孤立する」ということではない。「人の手を借りることも、誰かを支えられる人であることも大事。地域の人に信頼される、認めてもらえる農業者を目指したい。まだまだ先の話だけど、いつかは自分が誰かに伝えられるような立場になりたいとも思います」。

収穫までに3年かかるというアスパラ。小屋迫さんは今年、初めて植え付けに挑戦する。

すっくと伸びたアスパラ

ふと目に留まった村の景色

1. 協力隊業務の一環で、ニンニクの植え付け作業を学ぶ。
2. 協力隊メンバーが中心になって企画した、農業体験イベントにて。「イベントなんてやったことなかったけれど、楽しいです」。
3. 研修先のアスパラ農家にて。頻繁に通えない分、一回の学びの密度は高い。

自分と地域。2つの軸を、心地よいほうへ

File.10
農政課
長澤 静香さん
【新規就農プロジェクト】

熊本県西合志町出身。2022年3月着任。体質改善のために野菜と果物生活を実践したことで健康を取り戻し、農の道へ進む。観光視点を取り入れた、イチゴ農家を目指している。有機栽培に挑戦すべく、山鹿市の農家にて研修中。

東京から、熊本へ

子どもの頃からものづくりが大好き。手づくりの洋服を販売し、夜遊びに繰り出しては「面白い大人」の話にワクワクを募らせていた10代。「熊本には、やりたいことがない」。そう思って、東京に飛び出した。

服飾専門学校を卒業し、十数年。刺激的な東京生活は、とても充実していたという。しかし、好き勝手な生活を重ねた結果、身体が少しずつ悲鳴を上げ始めた。「ただ生きているだけなのに、ケアが必要。なんだかな〜って」。思いきって食生活や運動習慣を変えてみた。するとどうだろう。「身体が気持ちいい」。長澤静香さんにとって、それは大いなる発見だった。

食への興味が、作り手への関心になり、さらにはその食を育む地域へと思考が深まっていく。次第に、農的なものごとに携わりたいという思いを強くする長澤さんがいた。

イベントで、ジンジャーエールを手作り

帰郷した長澤さんを、熊本は、かつてとは少し違う表情で迎えてくれた。「食べ物がおいしい。面白い人がたくさんいる。景色も最高！」。農的な暮らしを模索し、週末には農家バイトへ。太陽の下で汗を流し、「これだよこれ！」と、気持ちは一直線に農へ傾いていく。ついには、山都町のイチゴ農家に研修に入るまでに。その頃にはすでに、南阿蘇村で農業と観光を柱にした生業を持とうと決めていた。

自分軸と地域軸を育てる

研修を通して、農業の厳しさや難しさに直面した長澤さん。それでもブレなかった。気持ちを支えたもののひとつはきっと、地域という軸だ。

長澤さんは地域おこし協力隊着任前から、農業公社の取り組みに触れ、「環境と景観を守る農業」のありかたに深く共感したと話す。村内を見渡せば休耕地が増えつつあり、高齢化や人手不足の影は色濃い。そこに、環境・景観保全の考え方を組み込むことで、できることがあるのではないかと考えているのだ。「たとえば、高齢の農家さんのところに行って、農業機械作業を代行する。ハウスのボイラーに使う化石燃料を一部、バイオマスに転換してみる。農薬を減らしてみる」。長澤さん自身が少しずつ実践し、「面白そうだなって、興味を持ってくれる人がひとりでも増えてくれたらうれしい」。

無理を強いれば、歪（ひずみ）は大きくなる。長澤さんはそれを、実感として知っている。だから「まずは自分が基本」。自分を大切にして、心地よく生きられる要素を求めていく。そのエネルギーが自然と外へ向かい、いつしか共感の輪が広がっていったなら、その先に地域の新たな可能性が拓かれるかもしれない。

マルとピピ。大切な家族

1

2

3

1. 南阿蘇村の「村感」が気に入って、「ここで農業をやりたい」と思ったのだそう。協力隊として活動することで、「イチゴ栽培だけでは扱うことのなかった農業機械についても学べます」と長澤さん。写真は、管理機の使い方を教わっているところ。
2. 自宅の庭で、羊毛をマルチに使ったイチゴ栽培に挑戦中。
3. 15年暮らした東京は、「もうひとつの地元」。

File.11

農政課

鈴嶋 千芳子（ちほこ）さん

【新規就農プロジェクト】

熊本県氷川町出身。2022年3月着任。農業の現場は、毎日が発見の連続。「同じプロジェクトに従事するメンバーと一緒に頑張れることが楽しい。南阿蘇村にはおいしいパン屋さんとタイ料理屋さんがあるのもうれしいです」。

海外で知った日本の食事情

鈴嶋千芳子さんの経歴は、地域おこし協力隊メンバー内でも異色だ。大学進学を機に東京へ。卒業後は、ヨルダンの日本大使館へ勤務。農業に関連する職場ではなかったが、SNS等を通して、日本の食にまつわる情報に触れる機会が多くなっていく。「今思えば、もともと食に興味があったのかも。当時は、オーガニックって身体にいいんだろうな〜くらいのイメージだったんですけど」。農薬、輸入依存、遺伝子組み換え…。まずは知ることから、鈴嶋さんは少しずつ、自分自身の問題として食を捉えるようになっていった。「自分で農業をやりたい」。それは、ごく自然な帰結。

まずは農業の基本を学びたいと思っていたところに、カンボジアで、有機JAS認証取得のための農家研修などを行うNGOの仕事があることを知り、転職。事務作業が中心だったが、土地の特性を活かしたカシューナッツ栽培など、自分のやりたい農業につながるヒントがいくつもあった。

やりたいことを、楽しみながら

帰国後、熊本県を拠点に土地探しを始めた鈴嶋さん。着目したのは、農業の根幹をなす土。火山由来の黒ぼく土がある阿蘇は、有力候補のひとつだったそうだ。タイミングよく地域おこし協力隊の募集がかかり、南阿蘇村へ。

協力隊として携わる農業の現場では、初めての体験ばかり。「素人だから、なにをすべきかがそもそもわからなくて。管理って、いつ何をするのとか。ちょっと遅れたら、畑が雑草だらけ」。それでも「太陽の下で体を動かすことが好き。土と空気と水と太陽があって、種から作物を育てられることの魅力を実感しています」と、にっこり。

目指すは、地域循環型農業。ひとりで切り盛りすることをふまえ、できるだけ海外資材や農薬に頼らず、無理なく生きていく道を模索したいと考えている。その栽培方法に合った作物を何にするかは、まだ検討中だ。パン好きの鈴嶋さんには、グルテン含有量の少ない古代小麦の栽培構想もある。

やりたいという気持ち。それを種に例えるなら、鈴嶋さんはいま、種を芽吹かせるための自分という土を耕しているところなのだろう。

めぎ&りりー。
2匹の猫と暮らしています♪

目指したい暮らしに向かって、“やりたい”に素直になる

協力隊仲間と切磋琢磨!

1・2. 農業公社にて、白菜を育苗中。定植まで大切に育てる。
3. 古代小麦の播種をしているところ。雨量の関係で阿蘇では小麦が育ちにくいらしく、圃場をどこに持つかも検討中だ。古代小麦の起源は数千年前にさかのぼるとされ、現代ではアレルギー反応が出にくい食品としても注目される。

諦めないで、背負い続ける。
軽やかな覚悟を携えて

File.12
農政課
吉田 洋樹さん
【新規就農プロジェクト】

熊本県人吉市出身。2022年8月着任。就農後は、サツマイモ、カボチャ、栗、ハーブを中心に栽培することを考えている。収穫した野菜を生で食べるのが好き。「カボチャ以外はだいたい生で食べたことがあります」。

当事者になる決意

「日本の産業を支えるひとりになる」。吉田洋樹さんは腹を決めた。「農業で独立するということは、背負うこと。人の縁、自分の暮らし、経済的なことも諦めないでいたい」。心から信じられるものに出会えた。そんな自信と確信に裏づけされた言葉。

20代前半、健康志向の高まりから、スーパーで手に取る食品の品質表示に目が向くようになった吉田さん。小さな枠に並ぶ添加物の名前や化学式。なぜこんなにもたくさんの物質を使う必要があるのか。素朴な疑問から独自に調べていくうちに、安心・安全な食べ物への興味が深まっていく。

農家になると決めた吉田さんが向かったのは、宮崎県のとある有機農家。1年3ヵ月、研修を受けながら実際の現場を肌身で実感した。「代表は、四六時中農業で頭がいっぱい(笑)。いつも一生懸命で、感覚と熱意とエネルギーがすごい。やっぱり、農業はおもしれぇなって」。技術を覚えることより、農家として動ける身体をつくることが研修の主目的。なんでも生で口に入れてみる習慣が身についたのもこの頃で、「生食って、安心・安全の象徴みたいなことかも」とのこと。

会社員としてのビジネスしか知らなかった吉田さんは濃厚な人間関係に戸惑うこともあったそうだが、「自分が、じゃなくて、お互いに知っていくことが大切」だと気づいたことで、地域に根づくことの意味を考えるようになっていく。村の地域おこし協力隊になったのは、「地域とより深い交流ができそうな点に魅力を感じたから」だ。

背負い続ける覚悟

南阿蘇村での暮らしぶりについて尋ねると、「軽トラを運転しながら、最高かよ！ って何度か叫んじゃいました(笑)。山と空と雲のコントラストがいいですよね～」と茶目っけたっぷりの返答。それからこう、言葉を重ねた。「農業がこの景色を守れる立場にあることを、誇らしく思います。ここで農業を営んでこられた先輩たちを心から尊敬する」。吉田さんが背負うもの。そこにはすでに、「南阿蘇村の景色」が加えられている。「背負い続ける。(死んで)横たわるまで」。決意に満ちた言葉が重く感じられないのは、誰よりも吉田さんが、自らの選択を楽しんでいることが伝わってくるからだ。

できるだけ化学肥料や農薬に頼らないで済む農業。さらには、人の手を介さずとも、畑がひとつの生態系として成り立つような。「そのための土づくりを基本に」。吉田さんが笑顔で口にする理想には、逞しさと力強さ、軽やかさがあった。

1. 「誰よりも動いて、身体を動かしていきたいですね」と吉田さん。
2. 協力隊としてイベントの企画・運営にも携わる。「独立後もこんな風に、イベントができたら楽しそう」とアイデアを巡らせている。

移住前から親しくしている米農家の方と

村内の研修先、星ヶ峰農園にて

File.13

農政課

宮脇 悠さん

【新規就農プロジェクト】

熊本県熊本市出身。協力隊になることを後押ししてくれたのは、別の地域で有機農業を営む同年代。「自分より早く気づいて実践してきた人。その人がいるから、頑張れます」。絵を描くことが好きな一面も。

疑問を晴らしてくれるほうへ

世の中はどんどん便利になっているはずなのに心のどこかが満たされない。それがどこにあるのか、どんな形をしているのか、探してみようと一歩踏み出したときが、人生の岐路と呼べるときなのかもしれない。宮脇悠さんの話を聞きながら、そんなことを思う。

「人はなんで病気になるんだろう?」宮脇さんがその要因のひとつを食べ物と結びつけたのには、いくつかの経験があったからだ。

「幼い頃は酷いアトピー体質で、母は随分悩んだようです。食の視点から環境汚染にまで関心が深かった」。幸い症状は改善されたが、親元を離れて自炊するようになり、レトルト食品中心の生活が続いたことで、再び体調の変化を自覚しだす。

そんな折、仕事で訪ねた農家。そこには、出荷用と自宅用に別々の畑があった。なぜ分ける必要があるのか。調べるうちに、やはり食のありかたへと帰結していく。

「自分達が選んで口にする食べ物に体調不良の原因があったなんて、思いもよりませんでした」。食のことを知りたい、その食を育む環境のことを知りたい。「疑問を晴らしてくれる道は、農業だ、と」。

食べ物をいただく、ありがたさ

宮脇さんはなにも、「環境保全型農業が一番」などと主張するつもりはない。ただ、これまでの体験を通してそういう選択肢を知り、「自分が心地よいと思える方向はこっちだ」と感じているだけ。「その直感を信じたい」。自らの気持ちを確かめるような言葉の端々に、素朴な人柄が滲む。その道をまっとうするための知識と術を、ひとつずつ学んでいるところだ。

特に米への思い入れは相当なもので、「長い時間をかけてつながれてきた種がたくさんあるんです。昔ながらの知恵が凝縮されている。…米トークをしたら止まらなくなっちゃいますよ(笑)」。保存が利き、米粉等に加工できる点にも、可能性を見出しているそう。

加えて、「たくさんの人に、土に触れる機会を持ってもらいたい」とも話す。地域おこし活動の一環として農業体験イベントの企画を発案したのも、宮脇さんだ。命ある食べ物をいただくことが、どれほどありがたいことなのか。実体験として得られた気づきは、誰かの選択肢を広げる鍵になるかもしれない。

「未来の子どもたちに、この風景を残していけるように」。壮大にも思えるけれど、実はシンプルな意思をもって、宮脇さんは大きな一歩を踏み出した。

素足で入る田んぼの気持ちよさ!

業務外で援農に

命を育む、水・空気・土。この風景を未来に残せるように

1. 実務経験がほとんどなくても、協力隊業務でさまざまなことを学べる。田植機の操縦を勉強中の宮脇さん。
2. 企画した稲刈りイベントにて。生産者の話を聞くことは、なによりの学び。

3・4. 収穫後、一部ははさがけ、天日干し。そのほかは乾燥機で乾燥にかける。「予定通りにいかないのが農業。夜中もずっと乾燥機が動いています。水分量が規定値にならなければ、袋詰めの予定も遅れそうですね。お米として食卓にのぼるまで、こんなに大変なんだって実感しています。自分で育てた米は、きっとめちゃくちゃうまいんだろうな〜」。

人間と人間で向き合う。いつでも”学び“の姿勢を忘れずに

File.14

健康推進課

赤星 静香さん

【シルバー人材開拓プロジェクト】

京都府京都市出身。2022年11月着任。広い空と五岳の眺めに感動し、移住先を南阿蘇村に決めた。移住に向けて本格的に動き出してから5ヵ月というスピード感は、この地域から「呼ばれた」のではないかと思わせる。

介護という仕事

天職を、英語で「calling」というらしい。不思議な何かに呼ばれるようにして、縁がつながり、深まって、なくてはならない大切なものになる、そんなイメージが想起される。いつかどこかで聞いた言葉を、赤星静香さんと話しながら思い出していた。

赤星さんは根っからの「おじいちゃん、おばあちゃん子」。西陣織の職人だった祖父母の機織りの音を聞き、近所のお年寄りに可愛がられて育った。「大きくなったら、みんなを助けてあげられる人になる」。高校卒業後は病院の看護補助者となり、実務を学びながら介護福祉士の資格を取得。10年以上、第一線で介護に携わってきた。

「人生も仕事も、学べることがたくさんあります。利用者さんからも、職場の先輩からも、一生勉強させていただく気持ちで」。ときにはものすごくプライベートな部分に踏み込む仕事。それだけに、ストレートに人間力が問われる。赤星さんいわく、「互いに一線を引くことなく、人対人で関われる」。その関係性のなかで、相手の心からの笑顔が見られたときには…。「ものすごくうれしい」。

熊本県は夫の地元

キャパシティを広げる

現場ひと筋に邁進してきた赤星さんはいま、地域おこし協力隊としてシルバー人材センターの事務を仕事にしている。それは、自分のキャパシティを広げるための挑戦でもある。「生活に密着した介護を学ぶために、まず地域を知ることが必要だと思って協力隊になりました。年を重ねても介護の仕事に関わりたいから、ケアマネージャーの資格を取得したい。そのために事務スキルも身につけたい」。

初めての仕事に戸惑うことも多いが、持ち前の笑顔と真面目さで、着任間もないというのにすっかり職場に馴染んでいる様子。「シルバー人材センターの会員の皆さんに、生きがいを感じてもらえるような仕事がしたい」と意気込みも十分だ。

村で暮らし始めてから、いろいろな気づきがあった。「行政の人の対応が明るい！　移住前に想像していたよりずーっと、民間福祉の内容がすばらしい！　自分を偽らずに生きている方がたくさんいる！　自分自身のことだと、『顔が変わったね』って言われます。移住してからのほうが、表情がやわらかいらしいです(笑)」。

「人はひとりでは生きていけません。誰かに助けてもらったり、誰かを支えたり」。ときに傷ついたり、気持ちが萎んでしまったりすることがあっても、立ち返る場所は「人としての優しさでありたい」。そう願う赤星さんのしなやかな強さに胸を打たれた。

趣味はキャンプ！
自然の偉大さに触れる

1　シルバー人材サービスを利用したい人からの問合せ対応や、会員のスケジュール調整などの事務を担う。「サービスを利用した方からの感謝の声は、会員さんに伝えるようにしています。体調どうですか？ とか、ちょっとした世間話もコミュニケーションが広がるきっかけになります」と赤星さん。

2・3.　副業として、福祉センターのデイケアスタッフも務める。コロコロと弾むような笑顔の赤星さんに、お年寄りの皆さんも心を開いている様子が見て取れる。

言葉を紡ぐ生き方を中心軸に。「ただいま」と言える場所を増やしていく

File.15

定住促進課

家入 明日美さん

【移住・定住促進プロジェクト】

熊本県熊本市出身。2022年1月着任。地域おこし協力隊は、17年越しのふるさと学び直しの期間。最近、「いいところだなぁ」と実感できることが増えてきた。協力隊の業務と並行して、副業で編集・ライター活動も行う。

編集者というありかた

編集者、ライターとして、10年以上「書く」ことに携わってきた。しかし、同じ職業(地域おこし協力隊)に就く15人分の記事を一度に書いたのは、今回が初めてのこと。当然、15人いれば15人分の人生がある。一人ひとり、異なる幸せ、異なる価値観、異なるものさし。近しいかもしれない、と思う人がいてもピッタリ同じなんていなかったし、一見かけ離れたテーマで語っている人たちの深い部分に、共通項を見つけたりもした。

つくづく思うのは、ニンゲンという生き物の不可思議さ。正しいかそうでないかという尺では測れない、何か。自分自身も含めて、そこに横たわるある種の謎こそが興味の対象。だから、この仕事を続けているのかもしれない。

学生時代に研究していた
エゾナキウサギ

お守りで戒めの言葉

熊本で過ごした頃を振り返って印象に残っていることのひとつに、高校の教師の言葉がある。「救急車のサイレンが鳴ったら、勉強なんて放り出して教室の外に飛び出していく人間になれ」。人にも物事にも、他人面をせず関わっていけ。私には、お守りであり戒めの言葉。

大学進学以降は北海道へ。大学では野生動物の研究に没頭し、就職後は編集者として北海道を走り回る生活。そうしてたくさんの、お守りで戒めたる言葉を分けてもらってきた。

「生きるって、すごい」。取材を通してその人の大切にしているものに触れさせてもらう度に幸せを感じ、同じくらい、不安になることもあった。苦しくてしんどくて、楽しい仕事。文章を紡ぐことを通して、言葉ひとつ分、相手と真剣に関わることから逃げずにいたいと思う。

北海道も、そこで出会った人たちも大好きだ。けれどあるとき気づいた。生まれ育った熊本のことを、なにも知らない自分に。

「ただいま」と言える場所

北海道を離れるとき、友人たちには「行ってきます」と告げた。私にとって、北海道はもう「帰る場所」だったから。そしていつか、南阿蘇村も自分にとって「ただいま」を言える場所になればと思う。

地域を学び関わりながら、自分を馴染ませていく。地域おこし協力隊のありかたをざっくばらんに表現するなら、そんなところだろうか。協力隊全員が移住者であることを考えれば、私が携わる移住・定住促進プロジェクトにおいても同様のことが言えるだろう。まずは、言葉ひとつぶんから、お互いを知って関わり合う。その段階をサポートするような活動をしたい。この1年、地域の人たちの話に耳を傾けながら辿り着いた、現時点の結論だ。

北海道知床の森にて

1

2

3

1. 空き家・空き地バンクへの登録相談、移住相談などに、役場職員と一緒に対応する。今後は、地域の物語を記事にして発信したいと考えている。
2. 村の暮らしを体感してもらう交流会を企画。「村の素敵な人と会えてうれしい」「移住したい気持ちが再燃した」と感想をいただいた。
3. 副業で、情報発信講座(文章、写真、デザイン)の講師を担当。任期後の目標は起業と、熊本・北海道の二拠点生活。

わたしたち、仕事もあそびも真剣です！
オフショット集

南阿蘇村 地域おこし協力隊のSNS

隊員がプロジェクトに関する情報等を発信中♪ ぜひフォローしてください。

地域おこし協力隊 Facebook

農業みらい公社 Instagram

みなみあそ観光局 Instagram

あとがき

このタブロイドをひと言で要約すると、「わたしたち、こういうものです！」になります。世の中的には、なんとなく地域おこし協力隊の知名度が上がってきているようですが、その実態は意外と謎だらけ。ということで、皆さんがきっと疑問に思っているだろうことを、直接本人にインタビューしてきました。「こんな人が村にいるんだ」と、心に留めていただけたら、頑張って記事を書いた甲斐があります。未熟なわたしたちですが、これからもよろしくお願いします。　地域おこし協力隊　家入 明日美

わたしたちの主な活動場所

南阿蘇村震災伝承館 轍

- 黒川区創造的復興（**P.09**）

南阿蘇村農業みらい公社

- 有機農業推進（**P.10〜11**）
- 新規就農（**P.12〜16**）

南阿蘇村役場

- スマートヴィレッジ推進（**P.08**）
- 移住・定住促進（**P.18**）

南阿蘇村福祉センター

- シルバー人材開拓（**P.17**）

南阿蘇鉄道

- 南阿蘇鉄道復興支援（**P.04**）

みなみあそ観光局

- 地域経営組織推進（**P.05〜07**）

地域おこし協力隊って どんな制度？

地域おこし協力隊
LOCAL VITALIZATION COOPERATOR

外部人材
（全国の隊員：約6,000名）

- 才能や能力の発揮
- 新しい学び
- 自分らしい生き方の実現
- 地域とのつながり

地方公共団体等

- 柔軟な地域おこし
- 人口増と地域活性化

地 域

- 斬新な視点
- 地域活性への刺激

任期とその後（全国）

- 任期：おおむね1年以上3年未満
- 活動地定住率：約5割（近隣地含め約6割）
- 任期後の仕事
  起業約4割、就業約4割、就農約1割

経 費 上限480万円／人・年

- 報償費と活動費を含む（特別交付税措置）
- 隊員への起業継業支援等あり
- 受け入れ団体への隊員募集支援あり

総務省の目的

- 都市部から地方への人材流入
- 地域協力活動による活性化
- 任期後の定住、定着促進

※参考／令和3年度地域おこし協力隊の隊員数等について（総務省）

地域の一員として、村の活性化への貢献を期待。

南阿蘇村長
吉良 清一 氏

南阿蘇村では熊本地震後の2017年から地域おこし協力隊制度の活用を始めました。2022年12月現在までに30名の隊員を採用、現役隊員は15名で、さまざまな地域課題解決に向けたプロジェクトに従事してもらっています。

私が村の政策の基本とするのは、3つの「K」。すなわち、「暮らし」「環境」「活力」です。地域おこし協力隊の皆さんにも、自分たちが3つのKに携わっているという自覚と誇りを持って活動してほしいと願っています。村外から移住された皆さんにとっては、地域に馴染めるのか、自分の将来をどうするのかと、不安も多いことでしょう。まず私からお願いしたいことは、村の人たちと仲良くなってほしいということです。互いが互いの声に耳を傾けあい、理解しあえば、いずれ大きな力を生み出すことができると確信しています。

最初からすべてがうまくいくわけではありません。時間がかかるかもしれませんが、焦らずにこの村を知ることから始めてほしい。そして「南阿蘇村をよりよい村へ」という意識を大切に、任期後も地域の一員として存分に力を発揮していただきたい。それは南阿蘇村にとって、大きな希望ともなりえるのです。皆さんの頑張りは、村の人たちにも伝わることでしょう。地域活性化への尽力に、心から期待いたします。

南阿蘇村 地域おこし協力隊
ヒトコト録

発行人　藤岡政人、大内佑介、田内秀樹、桑原健一、野津周平、市村孝広、槌田晴菜、田上由菜、小屋迫瑛、長澤静香、鈴嶋千芳子、吉田洋樹、宮脇悠、赤星静香、家入明日美

発行日　2023年2月

取材・文・編集　家入明日美

撮影・写真提供　みんな

企画・発行　南阿蘇村地域おこし協力隊
南阿蘇村河陽1705-1
TEL.0967-67-2705

印　刷　株式会社城野印刷所

※掲載記事、写真等の無断転載はNGですが、撮影した記事の一部を個人のSNS等に掲載いただく分にはOKです！